

くて、柏の葉の紋章は城頭高くひらめいて、土佐国廿四万石の新太守として毅然たる貫禄は、南国新春の天地に清新の陽光をかゞやかしたのであった。

(2) 慶長九年の大地震・願船寺の草創記

大地震考

古来土佐の大地震と云えば、先づ、指を次の五つ〔寛文元年（一六六一—一〇・二九）、文化九年（一六三三—三三、二〇）のものを入れると七つ〕に屈するであろう。

- 一、白鳳十二年（六六四）十月十四日の夜の地震
- 二、慶長九年（一六〇四）十二月十六日、夜半の地震
- 三、宝永四年（一七〇七）十月四日の正午の地震
- 四、安政五年（一八五八）十一月五日、黄昏の地震
- 五、昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日、未明の南海地震

日本書記を繙くと、天武天皇十二年の条に、冬十月十四日、壬辰、亥の時に及んで、大いに震う、国を挙げて男女叫びまどいぬ。則ち山崩れ河湧き——土佐の国の田苑、五十余万頃、うもれて海となる。古老曰く、其の如き地動は未だ昔よりあらざる也。——と云うのが土佐の国の最初の歴史的地震である。白鳳十二年の事で、大凡、一千二百七十余年も昔の出来事である。

その時、黒田、黒土、上鴨、下鴨の四郡、二十六万石に及ぶものが陥没したとも伝えられてい

て、秋日、天氣の清明な時に、室戸岬頭に立って、遙かに西南方、足摺岬の方向を望むと、海底に長い堤の様に探る事が出来ると云う。これが太古の陥落した土地であると古来語られている。

白鳳以来、九百二十年の間、土佐には大地震の記録がない。この永い間は、無地震の時代であつたらうとは考えられないが、あつても被害の少ないものであつたらう。その千年に近い深い沈黙をつづけた大地に、突如として恐音をひびかしたのか、慶長の地震である。

慶長の大地震

山内一豊が土佐国守となつて入国して、未だ間もない、慶長九年十二月十六日の夜半、亥の刻（午後十時頃）の事で、大陽曆に換算すると、一六〇四年二月三日にあつてゐた。

この地震は、南は薩摩大隅から、東は遠州、伊豆、上総、八丈島の諸国に及んでおり、津浪がこれに伴つて、人家を押し流した大地震であるが、安芸郡崎之浜談議所の住僧権大僧都、阿闍梨曉印の「置文」と云う文書は、慶長の地震を後世に伝えた日本的の文献となつて、奥宮正明の谷陵記（コクリョオキ）、武藤致知の南路志、並びに宮崎竹助の三災録（サンサイロク）に、それぞれ収録されていて、「日本地震史料」の中でも、頗る異彩を放っている。谷陵記は抜萃であるが、南路志、三災録は、その全文を載せている。少し長文であるが、左にそれを掲げる事にする。

安芸郡崎之浜談議所之住僧、権大僧都阿闍梨曉印、干時、慶長甲辰国々諸雜言置事。

將軍大閣秀吉の御息、秀頼と申、御年十三歳御幼少故。三河国松平家康と申は日本第一の弓取

なり。然らば、大閤秀吉御他界の時、秀頼御幼少の間、御世を家康へ譲預させ給ひて、公家となされたまいて内府と申し、御世を納められ日本の將軍に成給う。加之。我朝握恣掌中。諸国の大名小名つかえ奉ること無比。

去る遠江の国山内対馬守殿と申御侍。土佐国御知行取らせ給いて、一国静謐に納め玉う。當時、崎浜の代官、此の対馬守殿御内、富永頼母殿と申す御侍代官にて仕えたまう。

慶長九年は如何なる年の逆旅ぞや。先づ一番に七月十三日。不時とみに大風吹き来り、洪水湧き、山の竹木を吹き倒し、もろもろの作物根葉を枯らし、家微塵に吹きなし、山は河となり、淵河は山と埋れ、人の首も、吹き切るほどの大風なれば、深山幽谷の土民等木におされて死するものあり。或は半死半生の消息、凡そ国土の人民何萬ともはかられず。

二番は秋八月四日。大風洪水、浜の砂を吹き上げる。

三番閏八月廿八日に又大風洪水す。

四番に十二月十六日の夜。頓に地震す。其の夜半ばかり、四海浪す。大潮入れて、国々の浦浦は破損滅亡す。崎の浜にも男女五十人余。波に流死す。其の内、代官の下代津の国、山田之庄郷、山田助右衛門殿と申侍、蓋し如何なる過去のむくいぞや。夫婦息子浪に取られて朝の露と消え給う。歎きても余りあり。無残なる哉いと惜しき哉。愁傷悲歎の涙なり。隣在所を聞くに。西寺、東寺の麓の浦分にも、男女四百人余死す。

甲浦は三百五十人死す。

穴喰には三千八百六人余死。この時

野根の浦は仏神三宝の加護にやあらん潮入らず。七不思議と云うべし。蓋、伝え聞くに、東を受け、南向きの国は皆潮入る。西を受け、北を受けたる国には心動、地震ばかりにて潮入らず。是を未來末代の言伝に書置也。

右の時、在所、庄屋は安岡吉左衛門也。談議所、讃岐国福宗の住人権大僧都暁印と申客僧居合申、有為目を見、すなはち、此置文作る筆者也。

汐の入時は談議所の阿弥陀堂の皮め木の上（一本に沓ぬぎの上まで）迄入る。中里鍛冶次郎左衛門がつば迄入る。川は船場の名木の出川迄入る。（今、大山に浪切不動立つ）八幡の大権現のらんかんの北の橋を打ちつぶる也。〔阿闍梨暁印の置文〕

尚、三災録には海部郡鞆津に立石と云う高さ一丈余の記念碑があつて、慶長地震に就いて、銘文を刻んでいる事を述べている。

慶長九年辰年の十二月十六日、亥刻。常の如く月白く風寒し。行歩氷る時分。大海三度び鳴り、人々大いに驚ろき、手を拱くところ、波浪頻に起る。その高さ十丈。来ること七度び、名づけて大潮と云う。剩え男女千尋の底に沈む者百余人。後代への言伝えのために。

暁印置文と併せて読んで見るとき、当夜の様子は明瞭にうかがわれる。

## 願船寺の草創

西寺東寺の浦分——浮津室津津呂の灘辺では、男女四百余人が溺死した程である。その夜の津浪の惨害が如何に甚大であったかが想像するに難くない。思うに、この近隣では半に近い多くの人が、その玉の緒をうばわれたものらしい。ところで、此の夜、浮津浦に一つの奇瑞が残された。

浮津の人家の数十軒が、大津浪にさらわれたその中に、不思議や、商人三太夫と云う者の家が、取り残され、家族も一同無事につつがなく助かったと云う事である。三太夫と云うと、和泉の国の人で、仏十郎と云う福人（中国、福建省の人）の末子であって、商買のため、遙々土佐の浮津へ来て、遂にここに有り付いたが、彼は日頃、阿弥陀如来を信仰して、家に安置して朝夕これを拝していたのである。

慶長九年辰、地震大潮入候みぎり、右三太夫、本尊の守護により不思議に相助り申候〔南路志〕

彼は阿弥陀如来の加護によって、百死に一生を助かったのだと、浦の人々は目を見はって、その功德をたたえた。それ以来、浦の中から阿弥陀如来を尊仰する者が、日増しに増加して行ったと云う。

自然と其の家を道場と申しなされ候

と云う様になった。然し

俗家にて僧形のもの無之、寺役相勤め申さず

と記しているのは何の理由かは分らないが、阿弥陀如来はそのままに、三太夫の子孫の者がまつていた様である。

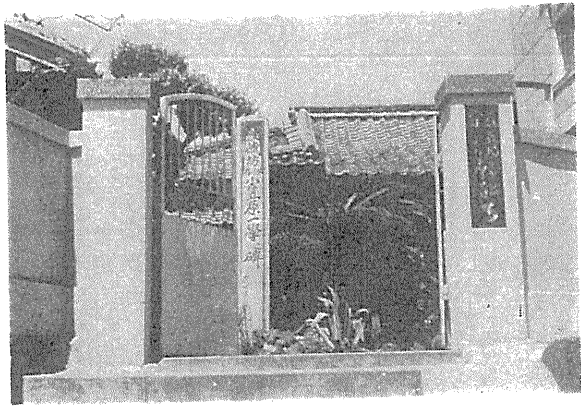
その後七十五年を経た時、延宝七年（一六七九）に室津港が開鑿され、浮津浦の人々が、室津港の舟着場近くへ移転を命ぜられた時、阿弥陀堂も亦、宝珠山の麓の只今の寺地に移ったのである。元禄年間に寺堂を改築したが、その時、初めて公儀に対して「正海寺」と法名寺の書付を差上げた。願船寺と云う寺号に変更したのは、その後三十余年を経過した正徳年間の事である。

其の後、正徳元卯年（一七二二）東本願寺より願船寺と申、寺号申請。代々相続仕也。

と南路志に記述している。

〔最蔵坊略記〕に拠ると左の如く記している。

最蔵坊、俗名小笠原一学は石見の国の産。安芸の国主毛利氏に仕え、禄三千石を食む。主家、関ヶ原の合戦に破るるや、剣をすて仏門に帰し、諸国を行脚す。元和初（一六五——一三）室戸岬に巡錫し、当時衰頽せる東寺を再建す。次いで元和四年、津呂港を開鑿。宝永七年以来、



願 船 寺

意を室津港開鑿西波止の築造に用い。是を国主忠義公に建議し、単身托鉢の淨財を以て此の工を起す。翌八年六月、国主を迎え、舟入の儀を行う。忠義之を賞し、この地に敷地三十代四歩を与えらる。因て一字の坊舎を建立し、魚船安全の祈願所とす。即ち願船寺の始なり。爾来此の所に住す。慶安元年九月五日示寂し給いぬ。

## 4 寅の大荒れ（嘉永七年・安政元年甲寅の大地震）

## 安政の大地震

この夏は大日照がつづいて百姓は毎夕空を仰いで、一雨ほしやと祈ったが、七月の中旬から雨が降り始め十月中旬まで長降り（御入国以来年代記）が、つづくと言ふ片日和の年だった。畑作は「大麥良かった」が「稲は出穂になって虫がついて」いたみが甚しかった。「寅の年」と云う印象が人々の頭をおしつけたが、霜月になって果して「寅の大荒れ」が現われたのである。——それは十一月四日と五日の二日連続して史上にも珍しい大地震が起ったのである。土佐では五日の地震が激しかった。

四日の地震は東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道に及び伊豆の下田や大島にも津浪が入って、多くの損害を生んだ。

室津・浮津の情況は当家記（西宮）にやや詳しい記事がある。

「五日。七時半時（曉の五時）稀なる大地震、津浪入。大麥に及び誠に恐驚至極——一統我先に立退事のみ。大騒に至り候——誰と無く只右往左往にて山へ山へと逃退いた場合——西の方から大音にて申し来るは……引き潮烈しきにつき、片時も油断為し難しと……沖合を見渡せば

……易からざる次第に成り行き——既に奈良師の前のシバエ（師箸）と申すは昔より見たる人無之に此の度は（引き潮がひどいので）、箸の根より長さ一丁ばかり山の如く相見え候」（と云う異変を見せた。今度のこみ潮に大津浪が襲うて来るのではあるまいか、と人々は大いに恐れふために）「只神仏を尊び、人力の及ばざる次第」——と運を天にまかせていたが……しかるに神慮に叶ひしか汐の上りも少なく——（津浪の難もまぬかれる事が出来てまづ安心）あまつさえ、室津港の潮四尺計りも足り申さざる様に相成りて、「両津は申すに及ばず、諸船入津出来申さず指つかえ……」

と云う様に地盤の隆起を見た。この一事をもつても仲々激しい地震であった事が充分に理解された。地震の直後——浮津下町から出火し大騒ぎとなったが、間もなく鎮火した。

「浜辺の納屋は引きこわれ」「殊に川の西側は大半つぶれ」て仕舞っていた。

室津湊がこの地震のため、四尺も隆起して港内が干上り、船の出入が出来なくなった事は既に一言した。ここに室津港普請の問題が起つて来た。「この度、御普請見積凡そ二万人程の見積と申す様の大いたみ……」と云われたが、実際のいたみは今少しひどかったようである。その後三年たつて安政四年二月下旬頃から、普請はやっと始まった。

「御普請、御積人夫凡そ五六万、湊口に中ばいと申す石御座候処、波止場え、ろくろすゑ、毎日男女赤手拭にて大石引き賑々敷く、内は水車をすえ、潮をせかせ、ごみをさらえ、凡日数七

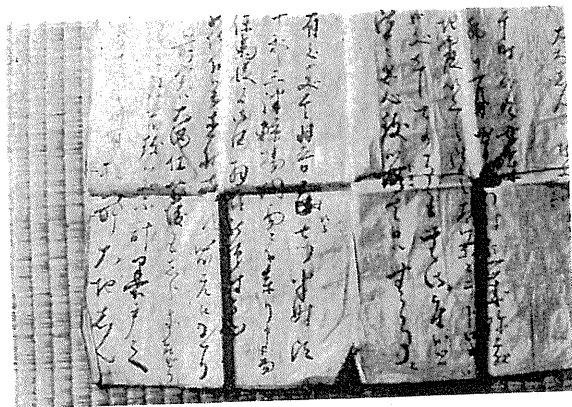
十余日も懸り、程無く五月節句相済……」（当家記）

かくて、目に青葉して初鯉釣りの櫓声に港の活気をとりもどす事が出来たのである。この年、

「麦は豊作、白米は壹貫に壹升。麦は二升。からいも壹斗の代金八九歩、かんば壹升拾七八文。——松魚船も鯉大漁で「浦々賑々敷」と書いて、蘇生の年を祝福している。

尚この地震については、元脇地の坂本勲の曾祖父十郎（當時二十一歳）の書いた大地震洪波事記（大ぢしんつなみの事しるす）が現存していて、不明克明に当時の状況を伝えている。

「平時嘉永七歳寅十一月四日〇つ時近年珍ら敷地震いたし、皆々大気におどろき候処、さしての事も無御座候と皆々安心致候処、其日は無事に有之候処、其翌日五日ひる七ツ半時頃、十郎三津鯨場用事にて参り申候て、保馬様より御酒拝領被仰付御馳走被仰下候て、直様七ツ頃宿元へかへり申候処、実は大酒仕前後もしらずたどりたりたどりにて帰宿致候処、不計蔵戸の宮の下に小き川有、於此所大地しんいたし道中あることかなはず、ようようと山中虎衛門殿宅のほとり迄参り候処、早蔵へやのひさし



大地震洪波事記

おち、僅に其時はお早死るは今なるかとみのけもよだつばかりに候処、大分やわらぎ候て、それより直様足に任して浮津をさして行ける処に、道々はわれ、人家みだれ、僅にその有様何にたとへんかたもなく、浮津に参着しけるに、数人中道寺山へ逃げ登りける。皆々浮津の人の言分には、早磯がした(ひいた)というて、洪波ツツミがくるとそのさわがし事言ばかりなし。それより十郎浮津西町に行ける処に、人々町中に雨戸を敷、その上に坐する者もあり、逃る者もあり、その有様目もあてられぬ次第也。それより十郎足に任して岩戸奥宮オノミヤさして急ぎける処に、浮津の磯田のほとりより浜を見物いたし候処、沖に有之諸人存じ候通トヨしはいの石と申て山の如くみえ、浜は壱町余りしお引、しばらく見物いたし候へども余りおそろしく候て、小山の方に逃行候て、ようすを見合候処、波山のごとくなりてなら師川へ打込あり様、おそろしく事い**う**ばかりなし。且又六地藏(今の造船場)のほとりは大海となり、それより十郎行ことかなわず、浮津有之長仙寺山五合目迄逃登りようす見合、岩戸さして行ける処、岩戸御家内様早御本家へ御出被遊、あとをさして行ける処に、不計岡山の下にて御目にかかり、直様岡山五合目へ逃登りけるようすを見合、御本家へ行けるに、川はわたりせ迄波打込、橋の下迄波来り候〇〇不明御座候。それより御本家に行けるに、屋敷外かわの堀きしかけあるいは長家のかわら七分どうりおち、皆々御家内様山王様へ、西の方の桜の木の下へ戸いた置などを敷御出被遊、その夜四つ頃又大きな物ゆり申候。これより六日七日八日九日十日十一日十二日十三日十四日十五日

十六日十七日十八日十九日廿日廿一日廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日朔日十二月二日三日四日迄地しんいたし申候。皆々ハキ地(脇地)の人は崎山へ逃登りける。あるいは元坂の常平作りの田へみなみな小さき小家を打、十四日五日暮しける。皆々大気にめいやく(めいわく)をいたし申候」云々。

## 附 節 忘れ得ざる災害と疫病

或る老嫗に「この世に生れてから今迄の間に、ほんとうに恐いと思つた事が何回ありましたか」と尋ねてみたところ、「そうですね」と言つて即座に「病氣では室戸が町になった年（明治四十三年のこと）のコレラとスペイン感冒（大正七年）、時化では大正元年と昭和九年の颱風、地震では南海地震（昭和二十一年）、それから太平洋戦争の終頃のアメリカの飛行機からの射撃の様もんでですねえ。」と答えてくれた。そこで筆者が「ハリー彗星が現れて来て、若し地球と衝突すると人類は破滅すると言つておじた、あの当時の思出はありませんか。」と尋ねたところ「成る程そんな事もありましたねえ。」と言つて思出した様に微笑した。筆者はその跡を追つて見たくなつた。コレラの事は前に（第七章第二節1、に於て）記述してあるので省略する事とする。

## 1 ハリー彗星の出現

ハリー彗星が現われて人心を戦々兢兢とせしめた当時の様子を、当家帳には次の様に述べている。明治四十三年の出来事であつた。

「五月には（ハリー彗星）出現し、式千弍百萬哩の尾を曳き、十九日午前十一時が彗星の太陽面に通過する時、廿日午後の九時が彗星の最も地球に接近する時で、是を過ぎれば彗星は反対に急速力を以て地球を去りつゝ、廿日過ぎは夕刻になつて姿を見せる様になる。兎に角太陽面通過の際が一番注意すべき時である。其れもホンの一瞬で、一秒間に三拾乃至四拾哩、即ち汽車が三時間も要して走る所を一秒時間に通過する其の速力を以て太陽面を通過する。又若も拾九日廿日の両日が曇天であつたら勿論ゼロであるが、平生曇雨天の際太陽面に一小斑点が現はれてすら、地球磁力に変動を生ずる位なれば、地球から僅か千四百哩の所に彗星と云う大邪間物が現はれるから、其際は必ずや地球面に少なからぬ磁力の変動も起り、高低気圧も不順となり従つて強風驟雨を齎す如き大變が起らんとも限らず。序ながら彗星を観測して周基を為すものと改定した（ハリー）は、拾七年後則ち西曆千七百五拾九年に此彗星が必ず出現すると予言して死んだ偉人である。但し右彗星地球に衝突したれば人命あやおき処、幸に無事。」

## 2 大正元年の暴風雨

大正元年八月二十三、四日突如として大暴風雨の襲來を受けた。二十三日の正午頃から次第に強烈となり、翌日午前四時頃まで大荒れに荒れた。そしてその颱風の目は室津の上空を通過した様に云われている。強烈な風がやんで暫く静かな晴天となつたと思つと、突然物凄い吹きかえしが来て人々は肝を冷した。その凄しい突風に家は飛び、松の大木は倒潰し、津浪も押し寄せて来た。その時避難した人々の話によると、無数の怪火が飛んで、空はあかあかとして昼の様であつたと云われ



る。夜が白らんで外に出て見ると実に目もあてられない惨憺たる状景であった。至る所に家は倒れる、倒れないと云っても屋根は殆んどなかった。室津港周辺に風致を添えていた松の太木は、僅かにその一本を残すのみにて全部倒れていた。風光明媚とうたわれた津寺や愛宕山の巨松も殆んど全滅に近かった。奈良師・岩戸・元の保安林の松の太木は軒々として到る処に倒れていた。室津港内の帆前船や発動機船・小職船は例外なしにひっくりかえり、或は破壊されていた。水尻と平尾は津浪によって可成りの被害を受け、波浪は渡川橋までも押し寄せていた。とりわけ室津と大谷附近が被害が多かった様に伝えている。山林や農作物の被害も亦甚大であった。或る故老は「かやった家は二百五十軒位あった様に聞いています。かやらなくても屋根の瓦は全くありませんでした。風はたしかに昭和九年の室戸颱風の時よりもえらかったと思います。」と云っている。

### 3 室戸 颱風

昭和九年九月二十一日室戸町を中心として、安芸郡東部は一大暴風雨の襲来を受けた。二十日颱風近づくとの警報があったが、ラジオのニュースは沖繩の南方に於て停滞、其の進路不明との事であり、その夕方は綺麗な夕焼のした誠に静かな晴天であった。町民はこんな上天気になったからには、何処かへそれたであろうとの安心感を持っていた様である。従って映画館も上映されていた。午後八時頃から次第に東からの風も募って来たが、人々はまだそんなに驚かなかった。ところが二

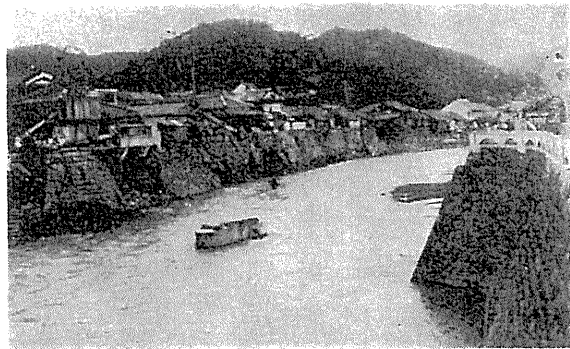
十一日午前四時頃突如として、世界的に有名な室戸颱風が上陸して来たのである。ほんとうに晴天の霹靂とも云うべきであった。風速実に六十六米、気圧六百八十四と記録されている。あっ！と云う間の出来事である。続いて十数米にも及ぶ海瀧が

怒号しながら来襲する  
事三回、阿鼻叫喚の巷  
と化したのである。そ  
して五時頃迄の約一時  
間が最も強烈を極めた  
のであった。  
被害状況は次の通りで  
ある。

一、死者	一〇	一、行方不明	四
一、重傷者	二七	一、軽傷者	九一
一、流失住家	九八	一、全潰住家	一四一
一、半壊住家	二八五	一、床上浸水住家	一〇三



流木の山（室津川下流・西野米作氏所蔵）



流失した両栄橋（西野米作氏所蔵）



落成式直前に倒壊した消防屯所（西野米作氏所蔵）

一、漁船流失全損者 一六一  
 一、橋梁流失 五  
 海瀨の米襲を受けた所は水尻・後免・下町・奈良師・船戸・行当・平尾等殆んど海岸一体であり、両栄橋・元橋も流されたのであった。農作物の被害に就ては、稲の刈入れは終わったので被害は少なかったが、甘藷は約六割、果樹・蔬菜は全滅であった。電信・電話も三日間は不通となり、道路の破損、橋梁の流失、或は保安林の松の大木が倒れたりして、高知方面との交通が開けるのには二十日余を要した。災害救助法によって二十四日食糧品を汽船で輸送して来たが、波浪が高くて舢船を出すのに消防団から決死隊を募ったと云う事である。皇室からは侍従を御差遣せられ、親しく被害の状況を視察せられお見舞をうけた。高知県史に

よると、

「……颱風の中心示度の深厚なりしこと、世界記録をつくり、風威の狂暴、被害の甚大なりし

こと、明治以来未曾有と称せられた。二十一日午前四時頃には土佐湾中部に達して最高頂に発達し、中心示度は六七〇ミリ程度と推定され、二十一日午前五時には安芸郡に上陸した。従来測候所の観測した最低気圧の記録は

一、明治十八年九月二十二日六八七・八ミリ（印度フォルスポイント）

二、昭和五年八月九日六九二ミリ（南大東島）

三、昭和九年九月三日六九八・五ミリ（石垣島）

であったが、昭和九年九月二十一日の颱風を室戸岬茶畑で観測したところによると、六八四ミリとなっており、恐るべき低気圧であるといわねばならぬ。従って風速も極めて稀に見る物凄なもの、室戸測候所が二十一日午前五時十分（中心から二三キロ距っていた）に測った二十分間の平均風速は六十五乃至七十メートルであった。……」